

病と健康をめぐる

中野重行「ニンゲン学」

「薬の副作用」といふ言

葉をどのように感じるでしようか。不安や怖い感じを持つ人もいるかもしれないが、副作用のない薬はありません。塩でも砂糖でもお酒でも多く摂取しすぎると体には毒となります。「副作用」があるからには「主作用」もあるはずです。医師にできる最善のことは

「主作用が最大に出るようにして副作用が出にくい薬の使い方をすること」です。

これは私が長年に研究してきた薬物治療学・臨床薬理学の基本です。

薬の副作用といわれているものは①治療目的としての主作用が強く出過ぎた場合(量が多かった場合など)

②治療目的以外の副作用が出た場合③薬の量とは関係なく出ることのあるアレルギー反応の三つがあります。

す。

総合感冒薬(風邪薬)に入っている抗ヒスタミン薬は主作用として発熱や鼻詰まり、咳など風邪によるさまざまな症状を和らげてくれますが、脳内に入って働

自身の「持ち味」生かす

に注目してその作用を治療に活用する工夫をすること
で新しい薬が誕生した例も
多くあります。

主作用や副作用という薬の作用の分類は、薬をどのように目的で使うかによって決まってくることであり、薬が本来持っている作用として副作用があるわけ

ではないのです。
同様のことは、私たちの日常生活にもあります。人

システムなどの改革を推進する際にも、対処しようとした問題を解決できる
という主作用は期待できま

すが、改革後に、想定していなかったさまざまな問題や不都合が副作用として表
れてくることもよくありま

す。
自分自身の特徴を知って、「持ち味」を生かせる
仕事や役割を選ぶ、また生
かせる場をつくっていくこ

短所抑え人生有意義に

くと副作用として眠気を生じます。脳内に入りにくい新しいタイプの抗ヒスタミン薬を開発して眠気を抑えるようにしています。

抗ヒスタミン薬による眠気は起こりやすい副作用です。しかし、逆に眠気を誘う効果に着目して入眠のために使うと主作用は眠気になります。ある薬の副作用

の個性は時と場所によって長所になったり短所になったりします。ですので、組織のマネジメントの観点から、各個人の能力と個性に

応じて適材適所に配置すると、チーム全体の能力が向上します。また、個人の長所を徹底して伸ばすと、短所が目立たなくなるということもありません。

とにより、社会への貢献度が高まり、充実した人生を歩むことができるのではないのでしょうか。自分の個性を生かしながら、味わいのある自分らしい生き方、有意義な人生を歩みたいものです。

(大分大学名誉教授・元同大学病院長)